

日本エッセイスト・クラブ

2022 秋

NO.74-I

会報

第70回クラブ賞受賞作

誰がために  
医師はいる

クスリと  
ヒトの  
現代論

松本俊彦

ちたが書房

日本エッセイスト・クラブ

# 会報

2022 秋

題字 阿部 眞之助  
表紙 よしだみどり  
カット

## 目次

第70回日本エッセイスト・クラブ賞

クラブ賞贈呈式

2

審査委員長報告

委員長 秋岡

伸彦

3

受賞作の紹介

委員 内藤

啓子

5

受賞の言葉

「ダメ。ゼッタイ。」と排除するのではなく  
「SOSを出しやすい」社会へ

松本 俊彦

8

クラブ賞一覧

18

クラブ賞70年 エッセーの真髄を問う

24

会員近況

25

自著紹介

27

2022年度定期総会

28

事務局から

30

日本エッセイスト・クラブ定款

34

会員名

36

2022年 第70回 日本エッセイスト・クラブ賞



『誰がために医師はいる』

クスリとヒトの現代論』

みずず書房

松<sup>まつ</sup>本<sup>もと</sup>俊<sup>とし</sup>彦<sup>ひこ</sup>

精神科医

第70回日本エッセイスト・クラブ賞は、6月27日、東京・内幸町の日本記者クラブ内で贈呈式が行われ、上記作品に賞状と賞金（30万円）が贈られた。

贈呈式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、前年と同様、会員全員の出席までは求めない形式で行われ、秋岡伸彦審査委員長が審査報告。続いて内藤啓子審査委員が受賞作品を紹介、その後、受賞者の松本俊彦氏が壇上で受賞の喜びと薬物問題への提言を熱く語った。

1953年（昭和28年）に創設されたクラブ賞の受賞者は、これで192人になった。

審査報告

賞の歴史の重み



審査委員長 秋岡 伸彦

わがクラブ賞は、記念すべき第70回の節目を迎えました。クラブ発足の翌1952年（昭和27年）に賞創設が決まり、その翌年から授賞が行われています。先人、先輩が築いてきた歴史の重みを感じます。

審査報告をいたします。

今回は、28名の会員から推薦された36点、出版社29社からの推薦74点、個人応募が8点で、合計118作品の応募がありました。

このうちから編著、復刻など審査基準から外れた作品を除外したうえ、3月15、16両日の予備審査を経て、対象を67点に絞りました。審査

委員11人による3回の審査で、次の6作品が最終候補に残りました。

山田庄一さん『京なになわ 暮らし歳時記』

ナガノハルさん『一万年生きた子ども』

駒井一慶さん『ふぞろいなキューリと地上の卵』

湯浅誠さん『つながり続ける こども食堂』

松本俊彦さん『誰がために医師はいる』

村山恒夫さん『新宿書房往来記』

それぞれ独自の領域あるいは分野で闊達な表現の筆を振っています。その中でも、松本さんの作品は精神科医療、それも薬物依存症の患者と向き合う自らの日々を描いて、まことに刺激的です。著者もなかなかの個性派らしい。極めて深刻な状況のなかで、ふと漂うユーモアが救いになっています。

審査委員多数の支持で、受賞作品に決まりました。おめでとうございます。クラブ賞受賞は毎回2、3人となることが多く、お一人の受賞は4回目です。

審査の過程で、しばしば起きる「エッセーと

は何か」という議論が今回は少なかったのですが、大学で教えていたり、あるいは教壇の経験のある審査委員もおり、「若者の本離れ」を嘆く声が多く出ました。

70年前、クラブ賞創設を言い出したのは、評論家の大宅壮一だったと伝えられています。その警句「一億総ナントカ」は、テレビの見すぎを憂えたものですが、さて、現状はどうなのでしょう。

本の楽しさ、エッセーの醍醐味を広く伝えていくことも、わがクラブの大きな役割、存在意義でしょう。70回目の節目に、そんな思いを深くした審査でした。

#### 審査委員

委員長

秋岡 伸彦

委員

秋山 秀一 海老沢小百合

高村 壽一 内藤 啓子

中丸 美繪 降幡 賢一

堀尾眞紀子 松本 仁一

よしだみどり 吉野源太郎

## 受賞作の紹介

# 「<sup>ア</sup>依存症<sup>イ</sup>」と「<sup>コ</sup>つながり<sup>ネ</sup>」

松本俊彦著 『誰がために医師はいる クスリとヒトの現代論』

審査委員 内藤 啓子

著者・松本俊彦氏は精神科の医師、嗜癖障害の臨床研究をされています。耳慣れない医学用語や薬の名前の羅列があるかと構えましたが、読みやすく時にユーモアを交え、心に残る文言の多い、著者の半生を絡めて描いた作品です。アデクションという言葉がしばしば出てきますが、嗜癖障害、依存症という意味で使われています。

著者は高校時代、加賀乙彦「フランドルの冬」を読み、精神科医という存在を知ります。「医学部ありき、後に精神科を選択」ではなく、「精神

科ありき、やむなく医学部進学」をしたそうです。医師となり、不本意ながら依存症の専門病院へと移動します。そこで出会った患者の内、アルコールより薬物の依存症患者に惹かれます。アルコール依存症の場合、壮年期になっからかかる事例が多いが、薬物依存症は比較的若い世代で、いわゆる非行に走り専門病院につながります。若い内から「気分を変える」ものが必要とした背景には、その人の過酷な成育歴が存在することに著者は気付きます。

若い薬物依存症の患者は、著者の中学の、シ

ンナー中毒だった友人を思い起こさせます。彼はシンナーから覚せい剤依存症になり、若くして事故死します。彼の言葉、「人は裏切るが、クスリは裏切らない」は痛切です。

ある時患者の一人から自助グループのミーティングに誘われ、「薬をやめるのは簡単だが、難しいのはやめ続けること」と教えられます。医療者は、薬害について説くのではなく、患者が溺れそうになったとき浮き輪を投げて、陸地を示すことが肝要とも悟ります。

著者自身が依存した、カフェインや喫煙、セガのカーゲームについても書かれています。生き延びるために必要な「不健康なもの」。それは



依存症を病気として抱える人だけではなく、大概の人は多かれ少なかれ持っているものかもしれません。

また、著者がイタリア車を好み、アルファロメオをまるで暴走族の車のように改造する話も面白いです。車の改造に気付くのは周囲の人より依存症の患者たちで、それは何故か。依存症の患者自身が改造を好む人たちだからと著者は言います。ありのままの自分に満足出来ず、何かを付け加えようとするのが病気の本質かもしれない。ピアスを身体のあちこちにつけたりタトゥー（入れ墨）を施したりする。リストカットにも似た「こころの痛み」を紛らわせるための「からだの痛み」を求めているのではないかと。

本書中、インパクトのある造語が出てきます。「ドリフ外来」と「白衣の売人」。ドリフターズの人気TV番組「8時だよ！全員集合」のラスト、歌の合間に「宿題したか、歯をみがけよ」と短い言葉を挟むのに似て、「飯食っているか、夜眠れているか、また来週」と、患者との話を短く切り上げるといなのが「ドリフ外来」だそ

うです。この「ドリフ外来」という言葉で思い出したことがあります。私ごとですが、父は晩年うつ病になり、入院を繰り返し亡くなりました。ある病院で、担当医の回診に何度か立ち会いましたが、まさにそれはドリフ回診でした。「いかがですか」と入ってきて生存確認のみで出ていく。その医師も大勢の患者を抱えて忙しく、父の妄想に付き合っている暇はなかったのです。ところが、もう少し話をしてくれたら良いのにと思っていました。本書にある「うつ病患者を励ましてはいけない」「安易に自殺念慮について質問してはいけない」「妄想の内容を繰り返し聞いたりはいけない」などの「神話」が生きていた時代だったからでしょうか。

薬物依存症の患者の半分は覚せい剤依存症だが、残りの半分は処方薬のベンゾジアゼピン系（以下ベンゾ）の睡眠薬、抗不安薬などの依存症である事実にも驚きます。良く効く代わりに耐性ができるのも早く、患者は服用する薬の量が増えていく。著者は精神科医療がベンゾ依存症を作り出している事実を警鐘を鳴らす意味で「精神科医は白衣を着た売人」という言葉を使い

ます。しかし、悪いのは薬ではなく使い方なのだと述べています。

この世には「よい薬物」も「悪い薬物」もなく、あるのは「良い使い方」と「悪い使い方」だけであること。「悪い使い方」をする人は薬物とは別に何か困りごとや悩みを抱えている。「ダメ、ゼツタイ」の標語のもと犯罪者として社会から葬るのではなく、薬に依存せざるを得ない痛みを抱えた人への支援こそが必要だと力説します。

「アディクション（依存症）の反対語は、しらふではなく、コネクション（つながり）」という作家ジョハン・ハリの言葉が紹介されています。著者も、孤立している者は依存症になりやすく、依存症になるとますます孤立する、だから、まずはつながることが大切だと書いています。コロナ禍により希薄になりがちですが、今回最終審査に残った他の作品にも、「つながり」について考えさせられるものがありました。依存症を理解し共に考える社会への入り口となる本書、あとがきにあるように多くの人に読まれたらと思います。

「ダメ。ゼツタイ。」と排除するのではなく  
「SOSを出しやすい」社会へ

まつもととしひこ  
松本俊考

このたびは、日本エッセイスト・クラブ賞を私に与えてくださり、推薦してくださり、また、審査をしてくださった同クラブの皆様にご心より御礼申し上げます。とりわけ、十代から憧れの出版社から著書を刊行させていただいたうえに、今回、このような歴史ある賞をいただけたことを本当にうれしく思います。

今回の本、振り返れば、実にいくつかの奇蹟が重なって実現したものという気がします。これまで私が書いてきた文章とえば、学術論文



であり、精神医学領域の啓発書ばかりでした。そうした仕事の自分なりの総決算のつもりで新書を書き上げ、少し空虚な気持ちになっていました。それは、新書という形式では表現できなかった思いがモヤモヤと残っていたからでした。そんなところに、タイミングよく十五年来の知己の編集者、田所さんが声をかけてくれたわけです。過去にも軽くお誘いめいたお言葉をいただいたことがありますが、その時には、「今の自分では無理」と固辞した経緯があります。ところが、なぜか今回はやってみたい気持ちになったのです。エッセイという形式ならば、依存症というもの、あるいは、依存症の治療や回復支援というものについて、これまでよりもっと広い層に知っていただけるのではないかと、という期待がありました。

意外に知らない方もいるかと思いますが、依存症専門医はセカンドクラスの精神科医と見なされてきました。「どうせ治らない、医者がやるべき仕事は病院に閉じ込めるくらいだ」と見なされてきたせいであるように思います。実際、

その通りでした。かつてアルコール依存症患者といえば、無理矢理入院させれば病棟内でのいろいろな悪さをしでかし、退院させるとすぐに飲酒してすぐに再入院する、といった具合で、「精神科医療界における嫌われ者」でした。当然、治療といっても病棟に閉じ込めて、患者を物理的にアルコールから遠ざけるくらいしかありませんでした。

ところが、ある人物の登場によって、わが国のアルコール依存症治療は大転換点を迎えます。その人物とは、精神科医にして作家であった、かの「なだいなだ」先生でした。なだ先生はそのやり方を百八十度変えました。もう強制的な入院をやめ、すべて自発的入院、開放病棟、それから病棟の運営は患者自治会に任せただけです。また、早くから断酒会などの当事者による自助グループとも連携してきました。当時としても人権に配慮した、当事者の回復力を信じた斬新な医療法でした。1960年代半ばの話です。このやり方は、アルコール依存症患者の治療を大きく変え、今日まで受け継がれています。しかし一方の薬物依存症に関しては、治療は



遠藤会長から賞状を受ける松本氏

遅れたまま、入院病棟は完全に「代替刑務所」のような役割を果たしていました。当然、薬物依存症の治療を専門とする精神科医は、セカンドクラスの精神科医である依存症専門医の中で、さらに差別される立場であった気がします。実際、差別されても仕方のない治療でした。

私が不本意にも依存症専門病院に赴任した二  
五年前、日本国内で薬物依存症の治療をする病  
院は、五箇所くらいしかありませんでした。そ  
の五箇所の病院にしても、入院治療は刑務所が  
モデルでしたし、通院治療に至っては、毎回の  
受診時に尿検査を実施し、薬物反応が陽性にな  
つたら、患者に警察への自首を勧めるとい  
いま考えてもとんでもない治療が常態化してい  
ました。

こうした理不尽な治療が、誰からの批判も受  
けることなく許容されていたのは、ある神話と  
いうか迷信が多くの人に信じられてきたからで  
す。つまり、薬物依存症の治療はむずかしく、  
それはアルコール依存症の比ではない、なぜな  
ら、薬物のおそろしさはアルコールの比ではな  
いから……という神話です。

しかし、かねてより私は疑問に感じていまし  
た。薬物依存症の治療ってそんなにむずかしい  
だろうか、と。実際のところ、私にはむずかし  
いとは思えなかったのです。いや、これは正し  
くないかもしれませんが。確かに治療がむずかし  
い方は少なくないのですが、それは依存症その

ものの深刻さのせいではなく、依存症以外の問題のせいであるように思えたのです。

依存症以外の問題とは、法律という自分が所属するコミュニティのルールを軽視せざるを得ないほど、深くコミュニティに絶望している、という事情を意味します。その背景には、様々なトラウマティックな体験や、人生早期から抱えているメンタルヘルスの問題に起因する「生きづらさ」があり、そのせいで身近な人との関係性につまずき、傷つき、人を信じられなくなっているのです。結局のところ、ある人にとつての「コミュニティ」とは、抽象的な概念なんかじゃなく、それまで出会ってきた身近な人総体、ないしは、その連続線上にしか想像できないものです。

こう言い換えてもよいでしょう。もしもその人がコミュニティのルールを軽視しているとするならば、それはその人がそれまで多くの身近な人間から尊重されてこなかったことを意味します。ですから、もしも薬物依存症の治療がむずかしいとすれば、それは薬物という化学物質の薬理作用の恐ろしさではなく、人間に対する

絶望の深さ、人間不信の深刻さによるものです。薬物依存症の原因は薬物にはありません。なぜなら、薬物を使用した経験のある人が全員、依存症になるわけではないからです。事実、国連の報告書によれば、ヘロイン、コカイン、覚



受賞の言葉を述べる松本氏

醒剤といった薬物の使用経験者のうち、依存症になるのは一割程度、つまり、薬物使用⇨薬物依存症ではないのです。

薬物の怖さを証明するために、かつてよく行われた実験があります。ネズミを一匹だけ檻のなかに閉じ込め、ネズミの頸静脈に点滴の針を刺す。そして、ネズミがレバーを押すと、点滴のボトルから依存性薬物がネズミの血管内に投与される、という装置を用いた実験です。すると、ネズミは日がな一日レバーを押し続け——つまり、薬物依存症に陥り——、最後は死んでしまいます。確かにこの実験は、薬物の怖さを示しているように思うでしょう。

しかし、ネズミが薬物依存症に陥ったのは、薬物のせいではなく、「檻のなかの孤独」のせいなのです。実際、ネズミを仲間たちと一緒に十数匹で過ごせる快適な環境に置くと、薬物に見向きもせず、仲間たちとじゃれ合ったり交尾したりすることがわかっています。

人間も同じです。実際、歴史的にも、あるいは、現在の世界を見わたしてみても、薬物問題が深刻な地域は、貧困や経済格差、差別や理

不尽な暴力が横行し、生きづらさが蔓延して自殺が多いところでは、

意外に誰も指摘していませんが、わが国において、戦後三回あった自殺急増のピーク——昭和二十年代後半から三十年代前半、昭和五十年代後半、平成十年前後——は、やはり戦後三回あった覚醒剤乱用期のピークと見事に重なります。

今日、米国で問題となっているオピオイド(医療用麻薬)・クライシスもそうです。実は、オピオイド乱用は、米国中西部のラストベルトという工業地帯の中年男性たちに端を発しています。安い人件費を武器とした中国の工業力向上



が、米国の対中国貿易赤字を増大させ、このラストベルトの工場を次々に閉鎖へと追いやりました。そして、職を失い、経済的に追い詰められた中年男性たちの自殺が増加するとともに、オピオイドの乱用も一気に広がっていったので

## 略歴

1967年生まれ。精神科医、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部長。1993年佐賀医科大学卒。横浜市立大学病院にて初期臨床研修の後、国立横浜病院精神科、神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学医学部附属病院精神科を経て、2004年に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部長に就任。その後、同研究所自殺予防総合対策センター副センター長などを経て、2015年より現職。著書に『自傷行為の理解と援助』（日本評論社2009）『自分を傷つけずにはいられない』（講談社2015）『もしも「死にたい」と言われたら』（中外医学社2015）『薬物依存症』（ちくま新書2018）他多数。

す。

アメリカ先住民のアルコール依存症問題でもそうです。ヨーロッパから新大陸にやってきた白人たちは、先住民を迫害し、彼らが長く居住していた広大な土地を侵略しました。その代わり、先住民たちをきわめて小さな保護区へと移住させ、強制的な同化政策によって彼らの文化や経済的基盤を破壊しました。さらに先住民の子どもたちを白人文化と同化させるため、親から引き離して寄宿学校に閉じ込め、母語を話すことを禁じました。数年後、学校を卒業して帰郷した子どもたちは、故郷の生活に不適応となり、保護外の街では白人から差別され、二重の意味でコミュニティを失いました。彼らは、白人たちが持ち込んだウィスキーを啣って日々を過ごすなかで、保護区内のアルコール依存症が深刻な社会問題となったのです。

先住民における高いアルコール依存症罹患率は、決して彼らの先天的素因によるものではありませんでした。というのも、先住民のアルコール依存症予防対策に関して興味深い事実があるからです。禁酒令を出した保護区では、アル

コール依存症に罹患する先住民はいなかったものの、アルコール依存症に付随して頻発する児童虐待や夫婦間暴力、様々な暴力犯罪が多発したそうです。一方、禁酒令はとらない代わりに、同化政策はとらずに先住民の伝統や信仰を尊重した保護区では、人々のアルコール依存症の罹患率は白人社会におけるそれとさして変わらなかったそうです。このことは、アルコール依存症、あるいは、アルコールに関連して発生する様々な社会的問題は、単にアルコールという化学物質だけが原因ではない、という可能性を示唆しています。

私が著書を通じて多くの人に知っていただきたかったのは、まさにそういうことなのです。

ところで、三年という長い連載期間のなかで、私自身、ずいぶん変化しましたし、社会も大きく動きました。何より一番の変化は、連載期間の後半よりコロナ禍に突入したことです。

それまで診療のない日は連日のように国内各地を講演して廻っていたのですが、講演のスケジュールがことごとくキャンセルとなり、私自

身、生活が一変しました。突然、どっと増えた暇な時間をどう使ってよいかわからなくなりました。唐突に感染症の勉強を始めました。といっても、決して感染症の診断や治療の勉強ではなく、人類の感染症との戦いの歴史を学び直すべく、あれこれ本をむさぼり読みました。

そのなかで気づいたことがあります。それは、薬物問題と感染症問題には似ている点、共通点が多いということです。

ここでは共通点を三つあげておきたいと思えます。一つ目は、いずれも世界のグローバル化、もつといえ、人と人との邂逅、異文化との遭遇と密接に関係している、ということ。大航海時代、ヨーロッパの人々は、新大陸から梅毒と引き換えにタバコとカカオ、コカインを手に入れ、新大陸の先住民たちは、天然痘に感染して大打撃を受ける一方で、ウィスキーという高濃度のアルコール飲料を手に入れたわけです。人が人である以上、あるいは、人類がたえず異文化と出会いながら前に進んできたことを思えば、薬物にせよ、感染症にせよ、私たちの社会にとって避けがたい問題であるといわざる

を得ません。

二つ目は、いずれも行き過ぎた予防啓発が差別や偏見の温床になる、ということ。かつて無らい県運動がハンセン病に罹患した人たちに理不尽な隔離と排除をもたらしたのと同じように、「覚醒剤やめですか、人間やめますか」のキヤッチコピー、あるいは、「ダメ。ゼッタイ。」運動によって、薬物使用者たちはあたかも殺人鬼のごときイメージを押しつけられ、恐れられてきました。その結果、薬物使用者たちは、保健・医療・福祉サービスから疎外されるばかりか、忌み嫌われて孤立を余儀なくされてきたわけです。

そして最後に、「敵対的」な対策を徹底させれば戦いは泥沼化するだけであり、長期的には「友好的」な対策こそ望ましいということ。ペニシリンの発見、それに続く各種抗生物質の発明は人類を感染症との戦いから解放するという希望を持たせましたが、最終的には新たに耐性菌を次々に作り出す結果となりました。あるいは、1980年の世界保健機関による天然痘撲滅宣言の後、人類は感染症との戦いに苦慮し



受賞の言葉に聞き入る参列者

てきました。HIV然り、エボラ出血熱然り、そして現在はコロナです。

薬物も同じです。ヨーロッパでは、アヘン吸煙を禁止したらモルヒネの静脈注射が流行し、モルヒネを規制したらヘロインの乱用が広がりました。さらに北米では、ヘロインを厳しく規制したら、ヘロインの何十倍も強力な医療用麻薬で多くの人々が命を落としています。日本でも同様です。大麻を規制すれば、脱法ハーブなどの危険ドラッグが広がり、規制を強化すればするほど、新たに登場する脱法的なドラッグはますます危険なものへと変化しました。最終的に危険ドラッグ乱用が鎮静化された現在、わが国の若者はドラッグストアで簡単に購入できる市販薬のオーバードーズによって自らの健康を害し、あるいは、命を落としています。

むしろ人間が人間として生きていく以上、薬物にはまる人は存在する。大切なのは、「薬物撲滅」と敵対的姿勢をとるのではなく、薬物依存症になったときに、気軽に、そして安心してSOSを出せる社会を作ることではないでしょうか？ つまり、「ウィズ・コロナ」にちなんでい

えば、「ウィズ・ドラッグ」です。

話が長くなりました。実は毎年六月二十日からの一ヶ月間は、薬物乱用撲滅月間、つまり、「ダメ。ゼツタイ。」強化月間で、今日はまさにその月間の真っ只中ということになります。

「ダメ。ゼツタイ。」というキャッチコピーは、人々を思考停止に追いやり、問題を抱えた当事者を阻害する言葉だと思えます。かつて性教育が「セックス、ダメ。ゼツタイ。」という方針で展開されていた頃、望まない妊娠をした十代の少女は、しばしば誰にも相談できないまま自らの命を断とうとしたものです。そして今日、薬物の問題を抱えた人が、まさに同じ状況に置かれているのです。

私は、本書を通じて少しでも多くの方が、単なる「ダメ。ゼツタイ。」という思考停止から脱出することを願っています。

最後にもう一度、このたびはすばらしい賞を与えてくださり、本当にどうもありがとうございます。

# クラブ賞贈呈式



## ❀ 日本エッセイスト・クラブ賞一覧 ❀

第1回～第70回

	氏 名	書 名	発 行 所
第1回 1953年	市川謙一郎 吉田洋一 内田亨	一 日 一 言 数 学 の 影 絵 き つ つ き の 路	北 海 太 陽 社 東 和 社 東 和 社
第2回 1954年	島村喜久治 秋山ちえ子 須田栄	院 長 日 記 私のみたこと聞いたこと 千 夜 一 夜	筑 摩 書 房 N H K 放 送 東 京 新 聞 社
第3回 1955年	木下広居 片山広子	イギリスの議 燈 火 の 節	読 売 新 聞 社 暮 しの 手 帖 社
第4回 1956年	小林勇 清水一 藤田信勝	遠 い あ し 音 す ま い の 四 季 不 思 議 な 国 イギリス	文 藝 春 秋 暮 しの 手 帖 社 毎 日 新 聞 社
第5回 1957年	小熊捍 中西悟堂 森茉莉	桃 栗 三 年 野 鳥 と 生 き て 父 の 帽 子	内 田 老 鶴 圃 ダ ウ イ ッ ト 社 筑 摩 書 房
第6回 1958年	大牟羅良 佐々木祝雄 松村緑	も の い わ ぬ 農 民 三 十 八 度 線 薄 田 泣 菫	岩 波 書 店 全 国 引 揚 孤 児 育 英 援 護 会 角 川 書 店
第7回 1959年	竹田米吉 曾宮一念 村川堅太郎	職 人 海 辺 の 熔 岩 地 中 海 か ら の 手 紙	工 作 社 創 文 社 毎 日 新 聞 社
第8回 1960年	高橋喜平 中尾佐助 萩原葉子	雪 国 動 物 記 秘 境 ブ ー タ ン 父 萩 原 朔 太 郎	明 玄 書 房 毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房
第9回 1961年	塚田泰三郎 宮本常一 庄野英二	和 時 計 日 本 の 離 島 ロ ッ テ ル ダ ム の 灯	東 峰 書 院 未 来 社 レ グ ホ ン 舎
第10回 1962年	小門勝二 小島亮一 大平千枝子	散 人 ヨ ー ロ ッ パ 手 帳 父 阿 部 次 郎	私 家 版 社 朝 日 新 聞 社 角 川 書 店
第11回 1963年	新保千代子 林良一 石井好子	室 生 犀 星 シ ル ク ロ ード 巴里の空の下オムレツの においは流れる	角 川 書 店 美 術 出 版 社 暮 しの 手 帖 社

	氏名	書名	発行所
第12回 1964年	片岡 弥吉 錦 三郎 関山 和夫	浦上四番崩れ 蜘蛛百態 説教と話芸	筑摩書房 赤光発行所 青蛙房
第13回 1965年	佐々木たづ 阪田 貞之 秋吉 茂	ロバータさあ歩きましょう 列車ダイヤの話 美女とネズミと神々の島	朝日新聞社 中央公論社 河出書房
第14回 1966年	白崎 秀雄 西山 卯三 阿部 孝	眞 價 住み方の記 ばら色のばら	講談社 文藝春秋社 高知新聞社
第15回 1967年	宮本 又次 安住 敦 佐藤 達夫	関西と関東 春夏秋冬帖 植 物誌	青蛙房 牧羊羊社 雪華社
第16回 1968年	団藤 重光 泉 靖一 畑 正憲	刑法紀行 フィールド・ノート われら動物みな兄弟	創文社 新潮社 協同企画社
第17回 1969年	佐貫 亦男 戸井田道三 坂東三津五郎	引力とのたかひーとぶ きもの思想 戯 場 戯 語	法政大学出版局 毎日新聞社 中央公論社
第18回 1970年	仲田定之助 島田 謹二 芥川比呂志 菊池 誠	明治商売往来 アメリカにおける秋山真之 決められた以外のせりふ 情報人間の時代	青蛙房 朝日新聞社 新潮社 実業之日本社
第19回 1971年	池宮城秀意 大谷 晃一	沖縄に生きて 続関西名作の風土	サイマル出版社 創元社
第20回 1972年	堀 淳一 角川 源義	地 図 の た の し み 雉 子 の 聲	河出書房新社 東京美術
第21回 1973年	鳥羽 欽一郎 斎藤 真一 樋口 敬二	二つの顔の日本人 警 女 地球からの発想	中央公論社 日本放送出版協会 新潮社
第22回 1974年	上田 篤 川田 順造 早川良一郎	日本人とすまいら 曠野か けむりのゆくえ	岩波書店 筑摩書房 文化出版局
第23回 1975年	加古里子 木村尚三郎 児玉隆也 松本重治	遊びの四季 ヨーロッパとの対話 一銭五厘たちの横丁 上海時代(上中下)	じゃこめてい出版 日本経済新聞社 晶文社 中央公論社

	氏 名	書 名	発 行 所
第24回 1976年	中野孝次 渡部昇一 高峰秀子	ブリューゲルへの旅 腐敗の時代 わたしの渡世日記	河出書房新社 文藝春秋 朝日新聞社
第25回 1977年	沢村貞子 杉本秀太郎 亀井俊介	私の浅草 洛中生息 サーカスが来た!	暮しの手帖社 みすず書房 東京大学出版会
第26回 1978年	野見山暁治 藤原正彦 長坂 覚	四百字のデッサン 若き数学者のアメリカ 隣の国で考えたこと	河出書房新社 新潮社 日本経済新聞社
第27回 1979年	篠田桃紅 斉藤広志 百目鬼恭三郎	墨いろ 外国人になった日本人 奇談の時代	P H P 研究所 サイマル出版会 朝日新聞社
第28回 1980年	三国一郎 太田愛人 小松恒夫	肩書きのない名刺 羊飼いの食卓 百姓入門記	自由現代社 築地書館 農山漁村文化協会
第29回 1981年	関 容子 古波蔵保好 両角良彦	日本の鶯 沖縄物語 1812年の雪	角川書店 新潮社 筑摩書房
第30回 1982年	足立巻一 伊藤光彦 岡田恵美子	虹 滅 記 ドイツとの対話 イラン人の心	朝日新聞社 毎日新聞社 日本放送出版協会
第31回 1983年	舟越保武 藤原作弥 志賀かう子	巨岩と花びら 聖母病院の友人たち 祖母、わたしの明治	筑摩書房 新潮社 北上書房
第32回 1984年	吉行和子 尾崎左永子 佐橋慶女	どこまで演れば気がすむの 源氏の恋文 おじいさんの台所	潮出版社 求龍堂 文藝春秋
第33回 1985年	関 千枝子 北小路 健 清水俊二	広島第二県女二年西組 古文書の面白さ 映画字幕五十年	筑摩書房 新潮社 早川書房
第34回 1986年	田村京子 豊田正子 中村伸郎	北洋船団女ドクター航海記 花の別れ おれのことなら放っというて	集英社 未来社 早川書房
第35回 1987年	金森久雄 堀尾真紀子 渡辺美佐子	男の選択 画家たちの原風景 ひとり旅一人芝居	日本経済新聞社 日本放送出版協会 講談社

	氏名	書名	発行所
第36回 1988年	北見治一 田中トモミ 山形孝夫	回想の文学座 天からの贈り物 砂漠の修道院	中央公論社 アドア出版 新潮社
第37回 1989年	河村幹夫 酒井寛 平原毅	シャーロック・ホームズの履歴書 花森安治の仕事誌 英国大使の博物誌	講談社 朝日新聞社 朝日新聞社
第38回 1990年	澤口たまみ 二宮正之 山川静夫	虫のつぶやき聞こえたよ 私の中のシャルトル 名手名言	白水社 筑摩書房 中央法規出版
第39回 1991年	岩城宏之 林望 山崎章郎	フィルハーモニーの風景 イギリスはおいしい 病院で死ぬということ	岩波書店 平凡社 主婦の友社
第40回 1992年	加藤雅彦 山崎柄根 山本博文	ドナウ河紀行 鹿野忠雄 江戸お留守居役の日記	岩波書店 平凡社 読売新聞社
第41回 1993年	志村ふくみ 鈴木博 中野利子	語りかける花 熱帯の風と人と 父中野好夫のこと	人文書院 新宿書房 岩波書店
第42回 1994年	伊吹和子 岸恵子 中山士朗	われよりほかに ベラルーシの林檎 原爆亭折ふし	講談社 朝日新聞社 西田書店
第43回 1995年	加藤恭子 徐京植 星野慎一	日本を愛した科学者 子どももの涙 俳句の国際性	ジャパントイムズ 柏書房 博文館新社
第44回 1996年	石坂昌三 辻由美 柳澤桂子	小津安二郎と茅ヶ崎館 世界の翻訳家たち 二重らせんの私	新潮社 新潮評論 早川書房
第45回 1997年	中丸美繪 松本仁一 山田稔 加藤シヅエ	嬉遊曲、鳴りやま アフリカで寝る あ、あ、そうか ね、ね、そうか 百歳人、加藤シヅエ 生きる	新潮社 朝日新聞社 京都新聞社 日本放送出版協会
第46回 1998年	岸田今日子 小林和男 細川俊夫	妄想の森 エルミタージュの緞帳 魂のランドスケープ	文藝春秋 日本放送出版協会 岩波書店

	氏 名	書 名	発 行 所
第47回 1999年	小 塩 節 金 森 敦 子 浜 辺 祐 一	木 々 を 渡 る 風 江戸の女俳諧師「奥の細道」を行く 救命センターからの手紙	新 潮 社 晶 文 社 集 英 社
第48回 2000年	多 田 富 雄 鶴ヶ谷真一 八百板洋子	独 酌 余 滴 書を読んで羊を失う ソフィアの白いばら	朝 日 新 聞 社 白 水 社 福 音 館 書 店
第49回 2001年	青柳いづみこ 三宮麻由子 簾内敬司	青 柳 瑞 穂 の 生 涯 そっと耳を澄ませば 菅江真澄 みちのく漂流	新 潮 社 日 本 放 送 出 版 協 会 岩 波 書 店
第50回 2002年	デビットゾペティ 日 高 敏 隆 四方田犬彦	旅 日 記 春 の 数 え か た ソウルの風景	集 英 社 新 潮 社 岩 波 書 店
第51回 2003年	上 野 創 黒 川 鍾 信 古 庄 ゆ き 子	がんと向き合って 神楽坂ホン書き旅館 ここに生きる一村の家・村の暮らし	晶 文 社 日 本 放 送 出 版 協 会 ド メ ス 出 版
第52回 2004年	畠 山 重 篤 松 尾 文 夫 柳 澤 嘉 一 郎	日 本 <汽 水> 紀 行 銃を持つ民主主義 ヒトという生きもの	文 藝 春 秋 小 学 館 草 思 社
第53回 2005年	久我なつみ 滝 沢 荘 一 竹 山 恭 二	日本を愛したティファニー 名優・滝沢修と激動昭和 報道電報検閲秘史	河 出 書 房 新 社 新 風 舎 朝 日 新 聞 社
第54回 2006年	小 林 弘 忠 内 藤 初 穂 中 島 さ お り	逃亡「油山事件」戦犯告白録 星の王子の影とかたちと パリの女は産んでいる	毎 日 新 聞 社 筑 摩 書 房 ポ プ ラ 社
第55回 2007年	植 村 鞆 音 畑 中 良 輔 山 口 仲 美	歴史の教師 植村清二 オペラ歌手誕生物語 日本語の歴史	中 央 公 論 新 社 音 楽 之 友 社 岩 波 書 店
第56回 2008年	堤 未 果 山 本 一 生	ルポ 貧困大国アメリカ 恋と伯爵と大正デモクラシー	岩 波 書 店 日 本 経 済 新 聞 出 版 社
第57回 2009年	平 川 祐 弘 池 谷 薫	アーサー・ウェイリー 『源氏物語』の翻訳者 人間を撮る ドキュメンタリーがうまれる瞬間	白 水 社 平 凡 社
第58回 2010年	秋 尾 沙 戸 子	ワシントンハイツ GHQが東京に刻んだ戦後	新 潮 社

	氏 名	書 名	発 行 所
第59回 2011年	田中伸尚 内田洋子	大逆事件 死と生の群像 ジーノの家 イタリア10景	岩波書店 文藝春秋
第60回 2012年	井口隆史 小池光	安部磯雄の生涯 うたの動物記	早稲田大学出版部 日本経済新聞出版社
第61回 2013年	尾崎俊介	S先生のこと	新宿書房
第62回 2014年	後藤秀機 佐々木健一	天才と異才の日本科学史 辞書になった男	ミネルヴァ書房 文藝春秋
第63回 2015年	磯田道史	天災から日本史を読みなおす	中央公論新社
第64回 2016年	阿部菜穂子 温又柔 原彬久	チェリー・イングラム 台湾生まれ 日本語育ち 戦後政治の証言者たち	岩波書店 白水社 岩波書店
第65回 2017年	鳥海修 原田國男	文字を作る仕事 裁判の非情と人情	晶文社 岩波書店
第66回 2018年	内藤啓子 新井紀子	枕詞はサッチャン —照れやな詩人、父・阪田寛夫の人生 AI vs. 教科書が読めない子どもたち	新潮社 東洋経済新報社
第67回 2019年	ドリアン助川 小堀鷗一郎	線量計と奥の細道 死を生きた人びと 訪問診療医と355人の患者	幻戯書房 みすず書房
第68回 2020年	岩瀬達哉 上野誠	裁判官も人である 良心と組織の狭間で 万葉学者、墓をしまい母を送る	講談社 講談社
第69回 2021年	さだまさし 柳田由紀子	さだの辞書 宿無し弘文 スティーブ・ジョブズの禅僧	岩波書店 集英社インターナショナル
第70回 2022年	松本俊彦	誰がために医師はいる クスリとヒトの現代論	みすず書房

### クラブ賞のご支援

今回も次の各社からご寄付をいただきました。  
小学館 新潮社 日本放送協会 NHK 出版

幅広い視点で選考

エッセーの真髓を問う

日本エッセイスト・クラブ賞は創設以来、70年70回の歴史を刻んだ。受賞者は今回を含め192人を数える。(文中敬称略)

「複雑なる世界情勢の中に、ともかくも独立の歩を踏み出したわが国は、政治、経済、思想その他各般に亘り、多くの問題に直面しつつあり」とは、1952年(昭和27)10月、賞制定を唱えるクラブ文書の冒頭にある。

講和条約は発効して、世情はなお混沌の中にあつた。目標に「公正な世論の喚起」を掲げ、「新鋭なる評論家・エッセイストが一人でも多く出現、新鮮なる活躍を」と、賞制定の所以を説いて、強い意気ごみを感じさせる。

具体的には、「新人エッセイストを待望、これを激励する」と述べ、対象は「文芸作品等創作を除く一切の評論、随筆等」としている。

賞創設を言い出したのはクラブ理事の一人、大宅壮一だったらしい。「小説等にはいろいろな賞があるが、エッセーには一つもない。資金も新聞、出版社に手分けして話し合い、援助して貰えれば」との語録が残っている。

資金面ではいささかムシのいいこの構想通り、各社の支援のもとで1953年(昭和28)6月、第一回授賞式を行い、めでたく発足している。

ただし、選考にはだいぶ苦労したようだ。審査委員も兼ねた理事長阿部眞之助は、「エッセーは、その範疇がひろく、かつ甚だ莫としている。さらに、いわゆる新人がエッセーを書いて、忽然と現れるということも少なかった」と述懐している。

初期の受賞者から、例えばとして勝手にお名前を挙げれば、木下広居

(第3回以下、回数のみ)、中西悟堂(5)、宮本常一(9)ら、当時でも新人とは言い難いはずの方々も少なくない。新人ならぬ「旧人の発掘」とは、遠慮のない阿部語録にある。

「エッセーとは何か」との命題にも突き当たった。その真髓を問う多様な議論を繰り返して、それがしかし、選考の過程で、より優れた作品を求めることにつながったのではないか。審査対象は、文壇の枠を超え、各界の専門家や学者、例えば理系の研究者や技術者らの著作にも及び、その幅広い視点がこの賞の特色となっていく。

クラブ賞受賞作品の一覧が本会報(18〜23ページ)に掲載されているので、ご覧いただきたい。精選されたエッセー全192作品。それぞれが著された時代を映して、そのまま後世に伝えるべき文化遺産と言えるだろう。

小説、詩歌の分野とは違って、総じて地味な印象はあろうが、選考の幅広さゆえに、ときには華やかな映

画・演劇・芸能分野の人々も授賞対象になる。石井好子(11)、高峰秀子(24)、沢村貞子(25)ら、瑞々しい文章作品が世間の耳目を集めた。

吉行和子(32)、渡辺美佐子(35)、岸惠子(42)らは現在、クラブ会員として、ときに会報にエッセーを寄せている。

エッセーの本質を問う議論は今も続く。ただし、現在のクラブ賞審査基準は、その対象を具体的に「随想、



雑誌『道路建設』の二〇二二年五月号にグラビア八頁「サンクトペテルブルクの道を行く」、七月号に「トランシルヴァニア地方の道を行く」が載った。この雑誌のグラビア頁を私が始めて担当したのは、一九九一年十月号「ウクライナ共和国・ヘル

評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など」に広げて、「新人の発掘に努める」という原則は変えていない。必ずしもエッセー賞ではなく、あくまでもエッセー・クラブ賞である。

クラブ賞賞金を含む経費に關しては、大宅の提案通り当初、新聞、通信、出版、放送各界の10数社の支援から始まり、やがて20社を超えるご協力を得て、特別会計で運営してき

た。

現在は特別会計とはせず、新聞など各社は法人会員として参加している。残念ながらマスコミの逆境にあつて、現在、法人会員は12社(別にクラブ賞賛助4社)になっている。長年のご協力には感謝申し上げます。

専務理事

秋岡 伸彦

ソンの道」(グラビア八頁)だった。以来三十年以上に渡って(ここ数年は年四本)、グラビア頁や表紙写真を担当させていただいている。三十一

年前のこの雑誌のグラビア頁には、市場、水辺の風景、家族連れでアイスクリームを食べる姿、人気の並木道ツヴォルフ通りを散歩する市民の姿など、今年のロシア侵攻で何もかも変わってしまったヘルソンに暮らす、当時の人々の平和で幸せそうな笑顔が溢れている。(秋山 秀一)

(佐々木健一)

雑誌『道路建設』の二〇二二年五月号にグラビア八頁「サンクトペテルブルクの道を行く」、七月号に「トランシルヴァニア地方の道を行く」が載った。この雑誌のグラビア頁を私が始めて担当したのは、一九九一年十月号「ウクライナ共和国・ヘル

引き続きNHKワールド(国際発信を主眼とする英語放送、日本でもスマホやPCのアプリなどで見られます)のプロデューサーをしています。英語でまず番組をつくりワールドで放送、日本語化してBS1や総合・教育で放送ということも多いです。(高木 徹)

ただいま、専門誌『日本語学』に日本語についての心配事を連載中です。季刊なので、三か月ごとに原稿を提出。一回の枚数が三〇枚。縮めるのに一苦労です。でも、考えることが多く、充実した日々を送っています。

(山口 仲美)

毎朝欠かさずウォーキングをしています。移りゆく景色、飛び交うツバメや白鷺、カッコウの声、時には外で飼われている犬と仲良くなり、田舎暮らしを満喫しながら、書き溜めたエッセイの出版準備をしています。

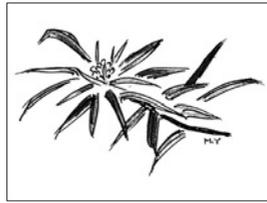
(竹本 祐子)

3年前、北欧を旅しアスプルンド設計の「森の墓地」を訪ねました。

先日、執筆中の明治の作家が眠る「染井霊園」に詣でた折、その「森の墓地」と同じ和音に包まれた感覚に戦慄が：初めて「地球の小ささ」を体感しました。かつて新たな視座を求めて右往左往。そこで得たのは、どれもこれも枝から摘んだ果実に過ぎなかつたようです。(海老沢小百合 賞をいただいた『宿無し弘文』ス

ティーブ・ジョブズの禅僧』が、9月16日、集英社文庫に入ることになり、猛暑のなか校了。こちらアメリカは、暑さもすごいがインフレもすごいです。とくに輸入物の日本食はひどく、痩せた鰯の干物1尾500円也。泣ける。

(柳田由紀子)



インターネットの発展で距離が消滅したかの現代ですが、ジョゼフィン・ペーカー、シャルル・アズナール、シモーヌ・ヴェイユなどに、人間の価値を高めた人物として国葬という最高の敬意を表した国と現今の日本との隔たりを、日仏両国に生き、双方の文化に惹かれる者として痛感しています。

(二宮 正之)

相変わらず市民講座月八回の仕事に追われています。万葉集の講座は、上野誠先生に助けて頂き、今年で十二年目になります。書道は毎日書道展に出席し続けています。

(今野 耕作)

コロナ禍で、国立民族学博物館でもイベントやフィールドワークがキャンセルになりました。四か国の研究者を、ズームで繋ぎ、フォーラムを開催。感染症の閉塞感を打ち破る交流に、歓声と笑顔が届きました。ある研究者は、南米にいる教え子と画像を見ながらのやり取りで、遺跡の発掘をしました。現地に出向くのと遜色のない成果を得たそうです。デジタル化には、解決しなければならぬ問題点もありますが、新しい世界を見せてくれています。

(田和 潤子)

日課としている自宅近くの公園で小鳥の声に耳を傾け草花を眺めているとき、ふと自らの人生を振り返ることがあります。そのたびに、長年にわたって心の片隅に抱いていた懸

案の母の人生記録を仕上げなければと思うのでした。猛暑の続くなか老体に鞭打ち、梅雨明けによくやく書き終え、七月初めに『命のかぎり』の名で上梓しました。懸命に取り組んだこともあり、このところ、ほっとする毎日です。思い返せば、私の人生は十八歳で奥飛驒の高校を出て上京するとき「自分でいいと思う道を歩け」と告げた母の言葉とともにあるように思われます。母がひながら綴った手記を読み、母の人生を振り返る。それは自らの人生を振り返ることでした。上梓した『命のかぎり』は母に捧げる『紙碑』です。

(砂原 和雄)

### 会員近況投稿のお願い

近況欄への投稿を歓迎いたします。エッセーや近況欄へのご感想などもお寄せください。字数は80字程度。

## 自著紹介

『デマ映えの民主主義』

——ネット社会をどう生きぬくか——

蜷川真夫著

新聞記者、雑誌編集者を経て20数年、ネットメディアの会社を経営しているが、ネットの社会病理は長らく人間社会が抱えている人間関係、共同体の病巣が便利な技術によって爆発した結果だと思ふ。

出所不明の情報がネット上に広がっていく「エコーチェンバー」、意外なものが見つからなくなった「フィリターバブル」、新聞、雑誌の記事がばら売りされるパッケージ編集の崩壊。デマ情報を集め、再生産する人々。

ネット時代に新聞、雑誌、書籍が

積み重ねてきた編集・制作のノウハウでメディアの情報の信頼性を担保する方法はないのかを書いた。

(かもがわ出版 1800円＋税)



ご寄贈と自著紹介のお願い  
刊行から概ね1年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、250字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。

# 2022年度定期総会

## 新年度予算採択 総額 832万円

当クラブ2022年度定期総会は、6月27日、日本記者クラブでクラブ賞贈呈式に先だって開かれ、新年度予算、同事業計画など5議案が提案通り賛成多数で可決、承認されました。

総会は前年度と同様、新型コロナウイルス感染防止の観点から、会員全員の出席までは求めず、原則として書面(郵送)による議決権行使と委任状を審査、採決する方式で行われました。郵送で届いた議決権行使の書面は116名、議長への委任状は34名の計150名と、会員総数(257名)の過半数に達し、総会は成立しました。

た。

採決の結果、2021年度事業報告、同年度決算報告、2022年度事業計画、同年度予算、および新年度役員人事の計5議案は、提案通り可決、成立しました。

2022年度予算総額は、前年比110万円減の832万円。出版不況などを背景とする法人会員の相次ぐ退会で会費収入が60万円減となるなど、財務の窮状は深刻化していることから、事務員の人件費、クラブ賞賞金をはじめ諸経費を切り詰める一方、収入面では特別維持会費のさらなる寄付収入を見込むほか、剰余金(資産)から83万円をあらかじめ繰り入れるなど、前年度に引き続き、苦しい予算編成となりました。

このため、新年度の事業計画では、今年も全会員を対象に「特別維持会

費」の寄付を呼びかける一方、緊急の課題として、正会員の会費値上げなどを検討することになっています。

また、事務所については、貸主と交渉の結果、22年8月から賃料を大幅に引き下げることになりました。

前年度決算、本年度予算詳細は、32、33ページに掲載しています。

なお、長年にわたり理事を務められた森脇逸男、深尾凱子、藤原房子の三氏が退任しました。これまでのご尽力に感謝申し上げます。

◇ 新しい役員名簿は、35ページに掲載しました。

新役員は次の通り。

(敬称略・五十音順)

理事

戸田桂太(元NHK出版「放送文化」編集長)

内藤啓子(「枕詞はサッチャーン」第66回クラブ賞受賞)

桃井恒和(読売新聞記者出身、元巨人軍会長)

# 「特別維持会費」ご寄付のお願い

クラブ総会に提案、承認されました通り、今年も会員の皆さまから「特別維持会費」のご寄付を募ります。できるだけ多くの方々のご協力をお願いします。当クラブではクラブ賞選考、会報発行、例会開催などの活動を行っておりますが、資金運営は年ごとに苦しくなっております。クラブ収入は会員各位にお納めいただく会費のほか、主に新聞、テレビ、出版など各社からの支援に頼っています。しかし、マスコミ各社の経営環境は依然として厳しく、十分な支援は得にくくなりました。ここ数年、法人会員の退会が相次ぎ、現在は12社のみとなっております。

理事会では今回も会費引き上げを検討しましたが、やはり任意の寄付が妥当との結論になりました。「特別維持会費」ご寄付の呼びかけは2013年以降、8回目です。前回は95名の方々から計219万5千円の浄財が寄せられ、クラブ運営に大いに役立てられました。

一口1万円以上で、ご協力くださるようお願い申し上げます。もとよりクラブ役員、クラブ賞選考委員は無報酬ですが、なお一層、クラブ運営の経費節減に努めてまいります。

日本エッセイスト・クラブ  
会長 遠藤 利男  
理事会一同

## 例会について

通常は6、7、8、1月を除く毎月、明宏ビル別館6階のクラブ室で午後3時から5時まで、ゲストをお招きして懇親の例会を開いて参りました。

しかし、一昨年に新型コロナウイルスの感染が国内で初めて確認されて以来、感染拡大が憂慮される状態が続き、例会や新年会などの会合は中止せざるをえない状況となっております。

再開は社会活動や感染状況を見定めて、後日お知らせいたします。

## 2022年度理事会報告

第1回理事会（22年6月27日）

- ・ 会員の現況報告
- ・ 役員人事について
- ・ 新入会員の承認について
- ・ クラブ室移転について
- ・ 本日の贈呈式について
- ・ 次期審査委員会委員長

# 事務局から

## 新会員の紹介

松本 俊彦(まつもととしひこ)氏  
第70回日本エッセイスト・クラブ  
賞受賞者。詳細は13ページに。



杉田 定大(すぎたさだひろ)氏

東京工業大学  
特任教授、(株)S  
MBC日興証券  
顧問。通産省大  
臣官房審議官、  
一般社団法人日中経済協会専務理事  
を歴任。著書に『起業大国を作る』  
など。東京都在住。

## 新会員推薦のお願い

### 会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知り合いなどで、会員にふさわしい方をご紹介くださるよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求められることになっていきます。

この「2名以上の推薦」という原則是変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

7月現在の正会員は195名です。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意していますが、新型コロナ禍の影響で在宅勤務などもありま

すので、なるべく郵便かメールでご連絡ください。なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。(理事会)

## 維持会費ご寄付のお礼

2022年7月末までに、次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

藤原 作弥	岸 恵子
加藤 恭子	轡田 隆史
大村 智	伊野啓三郎
有馬真喜子	佐藤 幸子
縫田 暁子	中村 政雄
森本 貞子	内藤 啓子
海老沢小百合	森脇 逸男
澤地 久枝	樋口 恵子
坂本 弘道	藤原 房子
野見山曉治	遠藤 利男

9月末まで

## エッセーを募集しています

会員の皆さまのエッセーを募集中です。電子版となった会報「冬」号(11月下旬発行予定)に掲載します。

応募エッセーは12年連続12回目の企画です。電子版への模様替えは、印刷等の経費節減とともに、会報を広く社会に発信することを趣旨としております。応募要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ新しく入会された方々には自己紹介、近況報告の意味合いも兼ねて、ぜひご応募くださるようお願いいたします。なるべく多くの会員の作品を

発表するため、2年(2回)連続の応募はご遠慮いただいております。

なお、当クラブのホームページで昨年の会報冬号のエッセーがお読みいただけます。

### 応募要領

- 一、テーマは自由です。
  - 一、本文は1600字。
  - 一、2000字以内の略歴を添付してください。
  - 一、できるだけ、メール添付でお願いします。
  - 一、応募原稿は原則としてご返却いたしません。
- ※詳しくはクラブ事務局まで。

### 会員からの寄贈著書

安嶋 明氏著『学びほぐし』が会社を

再生する 企業とファ

ンドの組織変革物語

八百板洋子氏再話『ブルガリアの昔話

いのちの水

中村登紀夫氏著『Je t'aime』家族と歩

み、放送に生きる

(私家版)

(5月から7月下旬まで)

クラブのホームページで  
会報「2022春」号を  
お読みいただけます

スマホ、あるいはパソコンの検索欄(Google、Yahoo!など)に「日本エッセイスト・クラブ」と打ち込み、検索の項目から「日本エッセイスト・クラブ」:「home」をクリックするとホームページに誘導されます。ホームページの「クラブ会報」をクリックし、各号の青色の「PDFダウンロード」を再度クリックすると、会報の内容をお読みいただけます。

# 2021年度 会 計 報 告

自2021年4月1日至2022年3月31日

支 出 の 部			収 入 の 部		
勘定科目	摘 要	金 額	勘定科目	摘 要	金 額
給料手当	事務局職員手当	2,640,000	クラブ会費	正会員・法人会員	5,635,000
郵 送 費	郵 送 費	323,849	総会等会費	総会・例会会費	0
印 刷 費	会報他印刷費	795,707	寄付金収入	特別維持会費他	2,880,000
会 議 費	総会等会合費	207,205	雑 収 入	会報広告代他	80,000
理事・例会費	理事会・例会費用	33,932	受取利息	定期・普通・利息	58
クラブ賞賛金	クラブ賞・賞金	600,000	小 計		8,595,058
函 書 費	クラブ賞審査図書	85,800	監 修 料		0
交 通 費	通勤交通費他	136,660	印 税 収 入		0
交際・慶弔費	慶 弔 費	11,191	還付所得税		0
通 信 費	電 話 料	111,971	小 計		0
手 数 料	振替貯金手数料	71,025	繰 入 金		700,000
賃 借 料	クラブ借室料	3,498,000			
光 熱 費	電気・水道料	141,668			
事 務 費	事務用消耗品費	133,163			
備 品 費	コピーリース代	11,880			
租 税 公 課	都民税・源泉税	84,480			
福利厚生費	社会保険料等補助	240,000			
雑 費		20,137			
予 備 費		93,700			
小 計		9,240,368			
剰 余 金		54,690			
合 計		9,295,058	合 計		9,295,058

<注> 予め剰余金から70万円を繰り入れているため、実質的な赤字は64万円5千円余となる。

## 貸 借 対 照 表

2022年3月31日現在

資 産 の 部			負 債 及 び 純 資 産 の 部		
勘定科目	摘 要	金 額	勘定科目	摘 要	金 額
現 金	手 許 残 高	21,928	基本財産		5,700,000
普通預金	みずほ銀行A	470,921	繰越剰余金		96,678
普通預金	みずほ銀行B	6,672	預り金		15,000
普通預金	みずほ銀行法人	0	当期欠損金		▲645,310
普通預金	ゆうちょ銀行	2,847			
定期預金	みずほ銀行	2,000,000			
長期預け金		2,664,000			
合 計		5,166,368	合 計		5,166,368

2022年5月18日

監 事 大高 英昭 監 事 今野 耕作

## 2022年度予算

### 収 入

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備 考
正会員会費	3,000,000	3,300,000	会費収入
法人会費	2,200,000	3,000,000	12社
小 計	5,200,000	6,300,000	
総会等会費	179,000	259,000	総会・贈呈式、例会等会費
寄付金収入	2,000,000	2,000,000	クラブ賞賛助金、維持会費等
雑収入	110,000	150,000	会報広告代
受取利息	1,000	1,000	みずほ銀行（定期・普通預金）
小 計	2,290,000	2,410,000	
監修料	0	0	
印税収入	0	10,000	
還付所得税	0	0	
小 計	0	10,000	
繰入金	830,000	700,000	
収入合計	8,320,000	9,420,000	

### 支 出

勘定科目	本年度予算(円)	前年度予算(円)	備 考
給料手当	2,040,000	2,640,000	事務局員1名
郵送費	340,000	420,000	会合通知、会報、図書等の送付代
印刷費	800,000	800,000	会報（冊子2回）、封筒等
会議費	210,000	270,000	総会・贈呈式会合費等
理事・例会費	40,000	800,000	会合費
クラブ賞賛金	300,000	600,000	賞金総額
図書費	100,000	100,000	クラブ賞審査図書費
交通費	140,000	140,000	事務局員通勤費等
交際・慶弔費	10,000	30,000	弔電等
通信費	110,000	110,000	電話・FAX・インターネット料金
手数料	75,000	75,000	郵便払込料金（会費）、振込手数料
賃借料	3,500,000	3,500,000	クラブ室賃借料、共益費等
光熱費	140,000	150,000	電気、水道代
事務費	80,000	120,000	事務用品、コピートナー
備品費	15,000	15,000	コピー再リース代
租税公課	80,000	80,000	法人都民税等
福利厚生費	240,000	240,000	社会保険料等補助
雑費	10,000	20,000	日用品
予備費	90,000	30,000	
支出合計	8,320,000	9,420,000	

# 一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

## 第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

## 第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

## 第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。  
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、

定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならぬ。

## 第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によつて、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

## 第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

## 第6章 計 算 (略)

## 第7章 清 算 (略)

## 第8章 附 則 (略)

## 役員名簿

会 長	遠藤利男			
理 事 長	(空 席)			
専務理事	秋岡伸彦			
常務理事	栗田 亘	高村壽一		中丸美繪
	堀尾真紀子	よしだみどり		
理 事	秋山秀一	梅津時比古		戸田桂太
	内藤啓子	原田國男		藤原作弥
	降幡賢一	松田宣子		桃井恒和
監 事	大高英昭	今野耕作		
事務局長(兼)	降幡賢一			
名譽会長	村尾清一			
	*	*	*	

# 会 員 名

(2022年7月1日現在 258名)

五十音順

## あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤	上野 創
上野 誠	白井 和恵	鶴飼 哲夫	内池 正名	内田 洋子
梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏	遠藤 利男
小川 津根子	小倉 董子	小澤 秀雄	小曾 戸明子	尾崎 左永子
尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄	大塚 義治	大岩 孝平
大城 浩詩	大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥	大村 智
大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子	岡田 恵美子	奥山 俊宏

## か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	勝方 信一	金井 辰樹
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北村 行孝	久我 なつみ
久谷 與四郎	轡田 隆史	栗生 將信	栗田 亘	黒川 鍾信
小池 光	小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子	小林 和男
児島 宏子	後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦	

## さ行

さだまさし	佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎
三宮 麻由子	志村 ふくみ	塩谷 靖子	下重 暁子	下村 満子
杉江 弘	杉田 定大	杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子
鈴木 章一	鈴木 博	砂原 和雄		

## た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實	田沼 敦子
田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司	高木 徹	高階 經和

高島 肇久	高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子	竹本 祐子
武本 宏一	谷地 快一	谷村 鯛夢	俵 万智	柘野 健次
辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ	出久根達郎
ドリアン助川	戸田 桂太	戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子
徳田 正幸	富永 孝子	富山 和子	鳥海 修	

### な行

内藤 啓子	中島さおり	中野 利子	中名生正昭	中丸 美繪
中村 史郎	中村登紀夫	中村 政雄	中村 龍介	中山 士朗
長井 好弘	長田 亮一	長友佐波子	長野 安恒	長屋 龍人
並木きょう子	二宮 正之	蛭川 真夫	縫田 曄子	野中 康行
野見山曉治				

### は行

長谷部 剛	葉山美知子	羽中田 昌	畑 正憲	畠山 重篤
濱邊 祐一	原 彬久	原田 國男	林 望	樋口 恵子
廣野 眞一	深尾 凱子	福田 章	福田はるか	福原 義春
藤原 勇彦	藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生
降幡 賢一	古川 洽次	古川 浩	穂苺 正臣	細川 俊夫
堀尾眞紀子				

### ま行

前田 晃伸	前田 浩智	牧 久	牧村健一郎	正籬 聡
又吉 國雄	町田 邦雄	松田 宣子	松本 仁一	松本 俊彦
萬年 浩雄	三島 利徳	水谷 亨	道脇 弘俊	南 砂
宮本 倫好	村尾 清一	望月 照彦	桃井 恒和	森 小夜子
森 孝之	森 武生	森 哲志	森本 貞子	森本 雍子
森脇 逸男				

### や行

八百板洋子	八木 美雄	安嶋 明	柳生 尚志	柳澤嘉一郎
柳澤 桂子	柳川 時夫	柳田由紀子	山川 静夫	山形 孝夫
山口 寿一	山口 伸美	山下 健	山藤 章二	山室 寛之
山本 一生	山本思外里	よしだみどり	養老 孟司	横山 昭作
吉岡 純子	吉野源太郎	吉原 賢二	吉行 和子	

わ行

若林

滋

脇

祐三

渡辺 綱纜

渡辺美佐子

渡邊 満子

## 法人会員（順不同）

---

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	集英社
産業経済新聞社	
日本経済新聞社	
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 2022 秋 (No.74-1)

2022年8月29日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋1-18-2

明宏ビル別館6階 〒105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール [info@essayistclub.jp](mailto:info@essayistclub.jp)

印刷所 (株)TBSシロワメディア

**re**  
**CLUB**